

吃音の当事者研究～大阪吃音教室のナラティブな実践を通して～

坂本英樹（どもる子どもの親、教員、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト）

長い前書き

吃音との出会い

題名に続く私の所属がいささか長いものになっている。私はどもる子どもの親であり、そのことが縁で、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトのメンバーとなった 50 歳の高校の教員である。

現在、中学 2 年の娘が小学校 5 年の秋に「音読ができない」と訴えてきたことが、私と吃音との出会いとなる。娘の示す状態が「どもり」と呼ばれるものであるということが理解できなかったときの不安、いや私以上に自分の状態を説明できる言葉がなくて不安にさいなまれていたのは娘自身であつたらう。音読や暗唱、発表に積極的であつた娘の「読めるのに読めない」、「明日も先生に当てられて、またつまる、皆に笑われる。同じところでつかかかって、読み直しをさせられる」という訴えが、「予期不安」や「場面恐怖」、「吃語恐怖」という言葉で理解、説明できることを知ったのは、日本吃音臨床研究会の伊藤伸二さんの著作を通してのことであつた。本からの知識を得るに従って、私は娘の成長過程のいくつかのエピソードが吃音ということにつながっていくことを経験していった。

そんなある日、私の机の上に山積みとなつた伊藤さんの本を見て、娘が「どもりと書いてある本は、私のことなの？ 治るの？」と聞いてきた。私の「そうや、つまると言っている話し方をどもりと言うんや。治らんようやけど、何か向き合い方みたいなのはあるようやで」という返答に、娘は一瞬口をゆがめて悲しそうな表情を見せたが、自分の状態を説明できる言葉を知ったことで、得体の知れないものから解放されたのか、少しほっとしたようにも見えた。こうして話し合えるきっかけを掴んだことで、吃音と向き合う私たち家族の歴史、物語が始まった。

私の立場

その年の暮れ、私は初めて「大阪吃音教室」に参加した。一回だけのつもりが、大阪吃音教室の「場のもつ力」にすっかり魅了された私は、娘のための情報を得る以上の熱意で皆勤に近い形での参加を続け、いろいろな活動をともにするようになった。こうして、どもる子どもの親、教員、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトのメンバーという少し珍しい私の立ち位置ができあがった。これからの記述はこの 3 つの立場が交差したものとなるだろう。

どもりを巡る私自身のナラティブ（Narrative=語り、物語）が少し長くなった。それはどもり始める時期やどもり方、本人や家族のどもりに対する考え方や受け止め方、日常生活における課題等、どもりが提起する課題は当事者にとって各人各様のものである以上、その豊穡な世界を考察、記述する基本となるのは、当事者からの「語り」をエビデンス（根拠）とする必要があるとの確信からである。

以下の論考は上記のような背景を通しての思索であるが、その責任は私個人にある。独りよがりの点や思い込みに過ぎない部分もあるだろう、読まれた方の率直なご批判をお願いしたい。そしてそこから新たなナラティブが立ち上がることがあれば、私にとっては望外の喜びである。

当事者研究の時代

当事者研究の始まり

べてるの家の向谷地生良さんは当事者研究の始まりを 2001 年のこととしている。統合失調症を抱えたあるメンバーが、自らの病気や日常生活の中から生じるストレスに向き合えずに、繰り返し「爆発」としか言いようのない形で親に無理難題を押し付け、そしてその理不尽さに何よりも自分自身が深く傷つき、困惑しているというそのメンバーに「爆発」の仕組みと自分自身との付き合い方を研究しよう」と持ちかけたことが始まりであるという。以来、「当事者研究」という言葉はべてるの家

の活動の広がりとともに、精神医療の領域を越えたものとなっている。いまさまざまな領域のセルフヘルプ・グループや当事者は自らの実践を当事者研究という視点から捉え直そうとしている。

たとえば発達障害の領域では、当事者の自伝、手記等が多数出版され、ある種のブームの観さえある(1)。それは自閉症スペクトラムの「相互的社会関係の障害」、「コミュニケーションの障害」、「想像力の障害」(2)という三つ組みの特徴として説明されるものには収まりきれない感受性、経験、世界があるとの当事者からの静かだが深い異議申し立てなのではないか。想像力の障害から当事者は予定の変更にも弱く、行動にこだわりが見られるとされるのだが、そのこだわり行動で当事者が何を感じているのかについて、私たちの多くは無知であり、当事者の経験を想像することすらしていないのではないか。想像力の障害はいったいどちらの問題なのだろう。それゆえ当事者は「自己語り」を紡ぎ出し、自分たちの経験世界を開示しようとしている。また、専門知をも相対化しようとしているのではないだろうか。

本稿の目的

本稿は上記のような観点から、吃音の当事者研究の可能性と課題を私自身が参加している NPO 大阪スタタリングプロジェクトが年間 40 回、金曜日の夜に開いている「大阪吃音教室」や今年で 24 回目になる「吃音親子サマーキャンプ」のナラティブにあふれた実践を通して考察することを目的としている。それは 2011 年の秋の吃音ショートコースで向谷地さんが参加者とのワークショップの際に「こんなところに鉦脈があった！」と何度も感嘆した、その鉦脈を発見する試みでもある。

吃音の課題とは何か—吃音の当事者研究の必然性

アメリカの言語病理学

ウェンデル・ジョンソンは半世紀以上前に言語関係図を通して吃音の課題を明らかにしている。立方体の X 軸を「話しことばの特徴」つまりどもる状態、吃音症状として捉え、Y 軸を「その特徴に対する聞き手の反応」、そして Z 軸を「その特徴と聞き手の反応とに対する話し手の反応」、つまり吃音に対する本人の認識、態度と捉え、吃音の課題は「これらの要素のそれぞれの大きさと、関係と、相互反応いかんによって違った形をとるわけである」(3)と述べている。

また、ジョセフ・G・シーアンは吃音を海面上に浮かんでいる氷山に喩え、吃音の課題は海面上に浮かんでいるどもりの状態より、「外からは見えない隠れた部分が、実は吃音の問題を考えるうえでは重要」(4)と指摘した。伊藤さんはこの吃音氷山説の海面下の部分を「どもるのは恐ろしい」という「感情」、「どもりは劣ったものだ」という「思考」、「どもりを隠そう」というような「行動」、そして「緊張して話すとき硬直してしまうからだ、人とふれあうのを拒むからだ」(5)という「身体」の 4 点に整理、発展させている。

このような吃音の言語病理学的な概念から導かれることは、吃音の課題の本質は連発や伸発、難発などのどもり方や頻度などの吃音症状自体にあるのではないということ、どもりに対する当事者の認識、態度、意味づけこそが吃音問題の本質であるということである。よくどもりながらも快活に行動的に生きている人がいる一方で、配偶者にさえ知られていないのに秘かに悩み苦しんでいる人もいるのである。ゆえに、ある文章を読ませ、どもる頻度をカウントするような、また何らかの尺度によって流暢性を計測して、吃音症状にだけ寄り添ったサポートをしても、結果としてかえって吃音の課題を個人の内側だけの何らかの問題であるかのように当事者の意識を強化してしまうことになるのではないか。吃音は個人の病理なのであるから、あくまでも「治療」、「訓練」というアプローチによって克服しなければならないという論理にからめとられてしまうことになるだろう。

当事者研究という吃音へのアプローチ

W.ジョンソン、シーアン、伊藤さんが主張するのは吃音の課題は自己理解の問題であるということ、自他の相互作用、関係性の中で吃音をどう認識するのかが吃音の課題を構成しているということである。伊藤さんは小学 2 年生の秋まで、どもりながら明るく活発な少年として過ごしていたが、

ある出来事をきっかけに吃音を否定的に捉え消極的な少年になり、21歳まで吃音に悩む人生を送ったという。ならば、吃音を否定的に捉え、悩んでいった過程、日常生活の中で心理的、社会的に形成された吃音に対する認識、態度などの課題を明らかにすることが、伊藤さんにとっての当事者研究となるであろう。吃音は純粋科学の対象にはならない。吃音の課題は自他のまなざしによって社会的に構成されたものなのである。それゆえ当事者研究という日常生活をベースとした個々に即したアプローチこそふさわしいのではないだろうか。「治療」、「訓練」の論理に対して、「生活」、「研究」の論理に私たちは立つものである。

さて、向谷地さんは当事者研究のエッセンスとして、①<問題>と人との、切り離し作業、②自己病名をつける、③苦勞のパターン・プロセス・構造の解明、④自分の助け方や守り方の具体的な方法を考え、場面をつくって練習する、⑤結果の検証(6)の5点をあげている。当事者研究に確立された方法論があるわけではないが、大阪吃音教室の例会や薬物やアルコール依存をもつ人々のセルフヘルプ・グループであるダルク(DARC=Drug Addiction Rehabilitation Center)の当事者からの声(7)に照らしてみても、このエッセンスは実態をよく解釈することができると考えられる。以下ではこの枠組みの①と②を中心に大阪吃音教室のもつ当事者研究的性格を明らかにしたいと思う。

自分の課題を眺める—外在化という経験

大阪吃音教室の光景

大阪吃音教室では毎回のように初参加の人がいる。初参加者の多くは少し緊張した面持ちで会の始まりを静かに待っている。勇気をもってこの場所まで足を運んだわけであるから、自らの悩みや疑問を他の参加者に投げかけたい、できれば聞いてみたいこともある。しかし、いままで人前でどもりについて話題にした経験はほとんどない、果たして自分の話はこの場で受け入れられるのかという不安もある。どもる人がこれだけ集まる場に参加するのも初めての経験だ。スペースのあちこちで話の輪が広がっているが、どもっているとすぐにわかる人もいるが、どもりとは思えない人もいる、こういう人たちもどもりなのだろうかなどと考えを巡らせていると進行役らしい人から、「初参加の方には自己紹介をお願いします」と声がかかった・・・。

初参加者の多くが経験する通過儀礼の一齣であるが、大阪吃音教室では時には初参加者が提供する話題を使って例会が進行していくこともある。私がこの1月に進行担当だった認知行動療法をテーマにした例会もそうだった。初参加者のKさんが出してくれたある状況をもとに皆で意見を交わしたのだが、それはKさんにとって不思議な体験だったのではないかと思う。その状況におけるKさんの気分や行動を支配する、Kさんのものの見方や考え方の中にある偏りや歪みを認知行動療法の一定の手順に従って考察していくのだが、参加者からは次々と自身の体験に照らしながら、Kさんのものと思われる感情や考え方についての発言が続いていった。それはKさんにとってぴったりとくるものもあったであろうが、「少し違うな」というもの「でも、もしかしたらそんな考えも頭の片隅にはあったかな」というもの、「いや、それは違う」というものさえあっただろう。しかし、この時間と場はKさんにとって決して不快なものではなく、むしろ心地よいものだったのではないか。また、自分の問題を人と一緒に話し合い、考えてみるとどこか見通しがよくなったようにも感じられたのではないだろうか。

ナラティブ・アプローチにおける外在化

セルフヘルプ・グループの目的は「そこに行けば安心していられる、本当のことを話しても誰からも脅かされない、仲間がいる、ほっとした時間がもてる。そういう場所を作ること」(8)である。そのためにアルコール依存をもつ人々のグループであるAA(アルコホーリクス・アノニマス)などの匿名性(アノニマス)を特徴とするグループでは「言いつばなし、聞きつばなし」を基本ルールとしているが、大阪吃音教室は参加者の安心・安全を大切にしたいうえで、呼応しあう、応答しあうセルフヘルプ・グループであろうとしている。

一人の参加者の語りは他の参加者の過去の経験を思い起こさせ、それが次の語りを生み出していく

のだが、その語りはそれまでの語りに影響され、その視点を既に取り込んだものとなっている。それは例会に参加し続けていく中で、他者の語り口、言葉が澱のように沈殿し、いつしか自分自身の言葉、語りになっていくという過程であり、「どもりに悩みながら生きてきた」というような固定された支配的（ドミナント）な自己語り・物語から、それとは別の「どもりと向き合い、サバイバルして生きてきた」というような従来のものに代わる（オルタナティブ）ストーリーへと変容していく経験である。それゆえたとえ同じエピソードを語ったとしても、語るたびに新たな視点、解釈が施され、豊かなものとなって参加者に届けられていくのである。

Kさんが経験したのはこれまでのどっぷりと自分の問題に浸かっていた状態から、大阪吃音教室のメンバーという他者の視点を通してその問題を外から、少し距離を置いて眺めるという経験である。向谷地さんのいう問題の棚上げ、「〈問題〉と人との、切り離し」作業、ナラティブ・アプローチでいうところの外在化という技法である。大阪吃音教室では場の力に支えられて、当事者の課題は外在化され、その声は場の中で多声となって反響し、参加者全員にシェアされる。べてるの家ならこれを「自分自身で、ともに」と表現するだろう。

自己を再定義する—吃音者宣言 名乗ることの意味—当事者研究の系譜

浦河、べてるの家では当事者が「精神バラバラ状態」や「統合失調症自爆型」、「統合失調症全力疾走型」というような自己病名を名乗る伝統がある。向谷地さんは『病名』は、医師が診断した医学的な事実やたんなる忌まわしい記憶としてではなく、一人の人間として懸命に生きてきた証としてある。精神病という病気の体験が誇りをもって紹介され伝えられるべきものとしての『病名』である」(9)との哲学であると説明している。興味深いのはこの自己病名の多くが「統合失調症〇〇型、〇〇群」というような医学的診断名と当事者の生活の苦労を表す言葉とのハイブリッドになっていることである。このような専門知と当事者からの意味づけとが排除しあうことなく対等な立場で共存している在り方を、べてるの家と共同研究をした石原孝二は1960年頃に欧米で起こった反精神医学をもじって、「半精神医学」(10)と表現する。

自己病名は精神医学からの専門知を取り入れつつも、それに収まりきれない生活世界の苦労を担う主体としての自己を立ち上げるための実践である。べてるの家ではこれを「苦労を取り戻す」と表現する。こうして人は自身の人生の主人公となる。この名づけられ、人から分類される、カテゴライズされる存在から、自ら名乗り、アイデンティファイする存在への転換の実践は、当事者の語りを正当なものとして聞く仲間やコミュニティの存在を前提として成立する。当事者研究を共にする仲間と自己病名はお互いが必要としあう関係にある。つまり「自分自身で、ともに」なのである。

べてる家のように何らかの課題をもつマイノリティが自分たちのコミュニティに依拠して、その社会に流布している支配的な通念や価値観を転換させて、自ら名乗り、自らの解放を宣言するという実践は、私たちの社会に一定の系譜として存在している。古くは大正デモクラシーの時代、全国水平社へと結集していくエネルギーの中で部落民自身が差別する側が投げつける「エタ」という言葉の意味を「自由、平等の渴仰者であり、実行者」、「階級政策の犠牲者」、「産業的殉教者」と価値転換させ、「吾々がエタである事を誇りえる時が来たのだ」(11)と喝破した「水平社宣言」(1922年)である。また、日本政府として署名はしたものの、いまだに批准に至っていない「障害者の権利に関する条約」(2006年)の第2条『言語』とは、音声言語及び手話その他の形態の非音声言語をいう」(日本政府仮訳2009年版)(12)という内容に先行する思想性をもつ、ろう者が発信した「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」(13)という「ろう文化宣言」(1995年)である。そして「吃音者宣言」(1976年)である。

吃音者宣言

日本初のどもる人たちのセルフヘルプ・グループ「言友会」10年の歩み、その語りと議論、実践の中から生まれた吃音者宣言は「私たちはまず自らが吃音者であること、また、どもりを持ったまま

の生き方を確立することを、社会にも自らにも宣言する」(14)と主張する。どもりながら豊かに生きるると自他に宣言するのであるが、「どもり」という名称を引き受ける、選び取るには向谷地さんの「病職ってむしろ肯定感とか希望とか可能性を前提にして起きるものである」(15)という指摘をかりるならば、吃音否定に対抗する吃音肯定のコミュニティにおいて実際にどもりながら豊かに生きている人々と出会うことが必要になるだろう。たとえば大阪吃音教室に集う成績をあげている営業職やどもりであるがゆえに一見当たり前と思われることにつまずいている子どもに対しての想像力を働かせることができる教員、例会の運営やホームページの作成に貢献しているメンバーと出会い、どもる当事者の示す洞察とユーモア、モラルをその語りと存在から聞きとること、感じとることが条件となるのではないだろうか。

例会の常連は例外なく自らの表現として「私もどもっているんですよ」というように「どもり」という言葉を使う。一方で「つまっている」、「つかかえている」という言葉を使う人もいる。どちらも同じことを言っているのだが、そこには吃音に対する意味づけ、態度、世界との向き合い方に大きな違いがあるのではないだろうか。

人もグループも成長する—大阪吃音教室の構造

大阪吃音教室の構造

先に大阪吃音教室は参加者の語りを保障したうえで、呼応、応答するセルフヘルプ・グループであると記述した。こうした協同的思考を通してそれぞれの語り、物語は例会の中で鍛えられ、いつしか「吃音とうまくつき合う」や「どもって生きる、覚悟を決める」、「あきらめる」、「吃音否定から吃音肯定へ」、「吃音とともに豊かに生きる」(16)というような言葉となった。大阪吃音教室は40年以上の歴史を積み重ねる中で、共通の言葉、価値観、考え方を獲得したセルフヘルプ・グループであると言えるだろう。このような所属するグループ、コミュニティのアイデンティティに関わる言葉や価値観、哲学のことを「構成的体制」(17)というのだが、構成的体制は決して固定されたものなのではない。

例会初参加者はおそらく初めて接するであろう大阪吃音教室の考え方や価値観に驚きや戸惑い、なかには反発も感じるだろうが、例会に参加し続けるなかでこうした価値観に対して自分なりの解釈や内実をある人は速やかに、またある人は時間をかけて深い理解と共に得ていく。しかしそれは新しいメンバーが大阪吃音教室のもつ考え方に一方的に順応していく過程なのではない。前述のKさんは例会終了時に「初参加の自分の課題について、皆さんが話し合ってくれたことに感謝します」と発言したが、ある常連メンバーは「むしろ私たちの方こそ、Kさんが新しい視点を提供してくれたおかげで、いい例会がもてたことに感謝します」と返した。この発言は社交辞令などではない、メンバー全員の共通する思いである。

ダルクでは「新しい仲間がいちばん偉い」(18)というルールがあるようだが、大阪吃音教室では初参加者には自己紹介以外にも、他の参加者に聞いてみたいこと、または話し合っほしいことがあればそれに時間をかけている。それは初参加者の疑問に答えるということがセルフヘルプ・グループの使命であるということだけではなく、例会自体にとっても新しい視点や自己語り・物語を得ることになることをメンバーが承知しているから。長年活動を続けていく中でメンバー間に無意味なヒエラルキーや力関係がなく、常連、初参加者の区別なく誰にとっても自由な発言が保障されているのは、新たな仲間の登場によって、人もグループも成長、更新していくことを誰よりもメンバー自身が深く自覚しているからであろう。

大阪吃音教室の日常実践

例会では認知行動療法や論理療法、交流分析、アサーション・トレーニングなどに取り組むことで日常生活に表れる参加者各人のものの見方や考え方、人間関係をつくるうえでの傾向を吃音という観点を通して考察する。それは言語関係図のY、Z軸、吃音氷山の海面下の部分へのアプローチになっていると同時に「吃音とつき合う」という考え方の内実を検討し、そこに新たな意味を与え、解釈し

ていく作業となっている。大阪吃音教室における「構成的体制は一方向的に個人を象るだけの不変の体制ではなく、個人の探索的な日常実践によって常に更新され続ける存在」(19)なのである。大阪吃音教室の構成的体制と参加者個人とは相互に影響を与え合う、双方向性の関係である。グループの活動が常に活性化されているのは、こうした構造を内在化しているグループであるからなのだ。

さて、今春から参加を始めた新たなメンバー二人が例会に参加することでエンパワーメントされて、相次いで職場で自らの吃音についてカムアウト、告知したという。それに刺激を受けて、メンバーの間では「どういうタイミングで誰にどう告知するのか」というテーマで例会を設定してみようというのが、例会終了後に立ち寄る喫茶店でのもっばらの話題である。大阪吃音教室では次々と取り組みたい新しいテーマが見つかっている。吃音を「治す」ことを主眼とした他のセルフヘルプ・グループとの違いは明白であろう。

当事者研究の可能性—吃音親子サマーキャンプのスタッフであること スタッフであることの意味—1

NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトが例会以外にも力を注いでいるのが、毎年滋賀県で行う、各地から集まる 100 名を越える吃音をもつ親子とスタッフが二泊三日で取り組む、夏の「吃音親子サマーキャンプ」である。私自身、この夏で 3 回目の参加となるが、このキャンプにスタッフとして参加するメンバーの姿勢に私は吃音の当事者研究の向かう先、可能性を感じている。

スタッフとして参加する当事者にとって、日常生活の中でいまでも吃音で困るという経験、その時にはやはり「嫌だな」、「恥ずかしいな」と一瞬感じることはあったとしても、それが吃音の悩みや課題として構成されることはもはやないと言っていいただろう。ではいかなる理由、根拠によってキャンプに参加しているのだろうか。私はそこにどもる当事者として、かつては深く悩んだ当事者としての「大人としての次世代への責任」という意識があるのではないかと考える。

人の生涯にわたる発達過程とその課題を明らかにしたエリクソンの心理社会的 8 段階、発達漸成論はよく知れている。その中でエリクソンは 7 段階目の中年期、成人期の発達課題を「生殖性」にあるとする。生殖性とは「成年の世代を引き継ぐ人々を生み養い導くこと」(20)である。教員や友達から時には心無い対応をされることもあるだろうが、自分なりのサバイバル術で学校生活を送っている子どもや悩む子どもにどう接してよいかかわからず、時には傷つけてしまい自らを責めることすらある親の姿はどもるスタッフにとって、かつての自分自身とわが親の姿そのものであろう。生殖性とは「後を引き継ぐ世代が生き延びるのにどうしても必要な社会的設備を発達」(21) させることでもあるが、セルフヘルプ・グループとつながり、吃音とともに豊かに生きている自分自身は次世代にとって、日常生活をサバイバルしてきた経験と知恵をもち、それを提供できる準備があるという意味で社会的設備というか資源であると考えることができる。

スタッフは当事者として、社会的資源として子どもや親の問い、呼びかけに応えることができるという呼応可能性に開かれていることを自覚するがゆえにキャンプに参加するのではないか。「責任」(responsibility)という言葉は語義的には呼応(response)の能力・可能性(ability)のことをいうのだが、「責任がある、ということは、・・・たがいに相手に呼びかけることができ、応じることが可能な間柄にある、という解放のしらせである」(22)と理解するならば、吃音の課題に子ども、学生時代、そして社会人として向き合い、サバイバルしてきたどもるスタッフの存在は、いままさにその課題の渦中にある親子にとって、吃音とともに豊かに生きているロールモデルとして、希望を感じさせるよい知らせ、解放のしらせとして映るのではないか。

スタッフとは責任という応答可能性を倫理として引き受けるもののことであり、その前提として、自らの言葉と経験が参加する親子に影響を与えることの意味を自己に厳しく問い続ける存在のことなのであろう。

スタッフであることの意味—2

一方で、どもるスタッフがキャンプ参加の親子から得るものも大きい。親同士の話し合いに参加す

ることで、かつてのわが親の思いを想像することもできるだろう。もしいまも過去の親との間のわだかまりに苦しんでいるとしたら、こうした経験は和解の契機となるかもしれない。また、子どもが示すユニークなサバイバル術や厳しい学校生活の中にあっても発揮される「回復する力、苦難に耐えて自分自身を修復する力」(23)であるレジリエンス(resilience)に触れることは次に続く世代を尊敬できる嬉しい経験だ。

そんな子どもの姿にかつての自分自身のエピソードを思い起こすこともできるだろう。スタッフは記憶の中に埋もれていた、たとえば友達のからかいを見事に跳ね返したというような、ナラティブ・アプローチでいうところのユニークな結果を発見していくのである。それは未だ語られていなかったストーリーがオルタナティブ・ストーリーへと変容していく過程である。当事者スタッフはいまの子ども、親の姿に自らの人生を重ねながら、新たな自己物語を語っていくのである。サマキャン後の大阪吃音教室の例会が、いつにも増して豊かな語りにも包まれるのはそれゆえであろう。「自己アイデンティティは、生活史という観点から自分自身によって再帰的に理解された自己」(24)なのである。

吃音親子サマキャンは大阪吃音教室の実践を二泊三日に凝縮した、子ども、親にとっての当事者研究の場であると同時に、スタッフにとっての当事者研究の場でもある。一般的にはスタッフは援助者の役割を担うものとされるが、サマキャンは、「援助をする者が、最も援助を受ける」(25)というヘルパー・セラピー原理がキャンプ全体を貫き、そのことに何よりもスタッフ自身が自覚的な意味において、参加者とスタッフとが対等に向き合っているキャンプなのである。

当事者研究の可能性

向谷地さんは当事者研究の方向性として、「エビデンスや権威のある専門家の中に取り込まれて」(26) しまうのではなく、「その障害や病気を持っていること自体の可能性」(27) を語っていくことであると述べている。大阪吃音教室には 40 年以上の当事者による実践活動の蓄積された歴史があるが「吃音の当事者研究」という言い方は生まれて間もないものだ。その方向性を現時点で考察することはまだまだ早い段階ではあるだろうが、前述した当事者としての責任を引き受けるということから考えると、「吃音をもつことの可能性」、「吃音が自分の人生に何を問うているのか」、「ギフトとしてのどもりの意味」(28) というような問いを生きるの中から見えてくるのではないか。私はそこに吃音の当事者研究の可能性を感じている。

それぞれの当事者研究

当事者とは誰か

これまでの論述から、当事者とは何かの問題を抱えて困っている人なのではなく、「自己定義によって、自分の問題が何かを見きわめ、自分のニーズをはっきり自覚することによって、人は当事者になる。したがって当事者になる、というのは、エンパワーメントである」(29) という定義が「当事者研究の時代」にふさわしいものであることが理解できる。専門家によって定義され、語られる存在から、自らの専門家として語り、仲間と連帯し、エンパワーメントしあう関係を築いていく存在へ。この定義は大阪吃音教室に集う人々の性格をよく表している。

さて、「問題には、それを構成するメンバーがいる」(30) のであるから、子どもの吃音の課題を構成するメンバーである親、教員、言語聴覚士もニーズがあると自覚するならば、当事者であるといえよう。では、これらのメンバーの当事者研究はいかなる課題をもっているのか。

親の当事者研究

自身、不登校を経験し、現在は教員、研究者の職にある貴戸理恵は不登校の「<当事者>学」をその著作(31)で試みている。貴戸は不登校に向き合う親、教員に対して「子どもの問題と自分の問題を区別する」(32) ことを学ばねばならないとして、「どんなに幼くても、子どもは『自分の問題』をその手に握む力がある。親、教師は『子どもの問題』を解決してやることはできない。できるのは、『自分の問題』を自らの手に握み、解決していく姿を子どもに見せることだけではないか」(33) と述

べているが、同じことが吃音に向き合う親にも言えるだろう。

昨年の夏、千葉市での第 1 回目の吃音講習会で伊藤さんは保護者との公開相談会の中で、「親は親の人生を生きよう」という趣旨の発言をした。親自身の課題と子どもの課題を分け、人生の同士、同行者であろうという意味である。どもるわが子の「進学、就職、結婚のことが気がかりで・・・」という気持ちは親心の表れかもしれないが、なぜそう思うのだろうか。そこにはどんな親自身の吃音観があるのだろうか。「いつか治るかもしれない」というまなざしで子どもに接することは子どもの現在をどういう目で見ていることになるのか。「どもっていてかわいそう」という思いはどういうメッセージとして子どもに伝わるのか。こうした問いに誠実に向き合うことが親自身の当事者研究になるのではないか。

教員の当事者研究

この同行者であろうとすることは子どもに接する教員にも求められる姿勢である。大阪吃音教室やサマキャン、志を同じくする各地のことばの教室の実践の中から生まれた「吃音ワークブック」(34)の編著者が伊藤さんと「吃音を生きる子どもに同行する教師の会」であることを思い起こしたい。教員は当事者である子どもとの対話を通して吃音への理解を深め、クラスの友達への働きかけを模索するというような日常実践をともしていく存在なのではないだろうか。特にことばの教室の教員は「定期的に吃音がある子どもたち同士が会える場を設定すること」(35)を意識して、ことばの教室の時間を子ども同士のセルフヘルプ・グループの場、当事者研究の場にするような工夫も必要であろう。

こうした姿勢は自らの子ども観、教師像の見直し、更新を必然のものとする。「職業的なアイデンティティの生涯にわたる追求」(36)こそ「教師であること」の存在理由なのではないか。教員とは当事者研究をするものことなのである。

言語聴覚士の当事者研究

問題を構成するメンバーの中で一番専門性が高いと考えられているのが、言語聴覚士であろう。吃音の原因がわからない以上、吃音症状の「治療」と称するものが確たるものではないことは自明のことであるのだが、専門家としては「治療」、「改善」に関するエビデンスとして数字のような何か目に見える形のものを示さなければならないという圧力もあるのかもしれない。しかし、「援助する側が自身の自己評価や自己効力感の修正のために対象者を利用する(abuse)危険性」(37)に陥ってしまえば、当事者のイニシアティブを奪い、吃音否定を助長してしまうことになるだろう。

ここで求められているのは専門家像の転換である。ナラティブ・アプローチでいう「無知の姿勢」に立ち、当事者とともに課題を追求するという新しい専門家像を構築することが、言語聴覚士にとっての当事者研究となるのではないか。「治せない医者」を自称する、べてるの家と関わる、浦河赤十字病院の川村敏明さんの在り方はその際、一つのモデルとなるだろう。

それぞれの当事者研究が共振し、反響しあう関係を私たちは願っている。

<引用> ※ 以下の文献の多くは当事者研究についての基本文献として活用できるものである。

- (1) ドナ・ウィリアムズ/河野万里子訳 1992(2000)「自閉症だったわたしへ」新潮社、テンプル・グランディン & マーガレット M. スカリアノ/カニングハム久子訳 1986(1993)「我、自閉症に生まれて」学習研究社、カムラン・ナジール/神崎朗子訳 2006(2011)「ぼくたちが見た世界」柏書房、ニキリンコ 2008「スルーできない脳」生活書院、綾屋紗月・熊谷晋一郎 2008「発達障害当事者研究」医学書院など多数、出版されている。
- (2) 高岡健 2013「続・やさしい発達障害論」批評社 p147
- (3) W. ジョンソン・D. メラー編/田口恒夫訳 1967(1974)「教室の言語障害児」日本文化科学社 p7
- (4) チャールズ・ヴァン・ライパー他/内須川洗・大橋佳子・伊藤伸二訳・編 1975「人間とコミュニケーション」日本放送出版協会 p41
- (5) 大野裕・伊藤伸二 2011「ストレスや苦手とつきあうための認知療法・認知行動療法」金子書房 p154
- (6) 浦河べてるの家 2005「べてるの家の『当事者研究』」医学書院 p4

- (7) 上岡陽江・大嶋栄子 2010「その後の不自由」医学書院、上岡陽江+ダルク女性ハウス 2012「生きのびるための犯罪」イースト・プレスなど。
- (8) 高松里 2009「新装版 セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド」金剛出版 p14
- (9) 浦河べてるの家 2002「べてるの家の『非』援助論」医学書院 p108
- (10) 石原孝二編 2013「当事者研究の研究」医学書院 p37
- (11) 上杉聡 2010「これでなっとく！部落の歴史—続・私のダイガク講座」解放出版社 p173
- (12) 長瀬修・東俊裕・川島聡編 2012「増補改訂 障害者の権利条約と日本」生活書院 p339
- (13) 現代思想編集部・編 2000「ろう文化」青土社 p8
- (14) 伊藤伸二編 1976「吃音者宣言」たいまつ社 p3
- (15) 向谷地生良 2012「べてるな人々 第3集」一麦出版社 p225
- (16) 伊藤さんが書いた冊子の題名である。伊藤伸二 2013「吃音とともに豊かに生きる」NPO 法人・全国ことばを育む会
- (17) 文化人類学者である大村敬一の言葉である。綾屋紗月・熊谷晋一郎 2010「つながりの作法」NHK 出版 p108
- (18) 綾屋紗月・熊谷晋一郎 2010p148 (19) 同書 p108
- (20) (21) E.H.エリクソン・J.M.エリクソン・H.Q.キヴニク/朝長正徳・朝長梨枝子 1986 (1990)「老年期」みすず書房 p78
- (22) 大庭健 2003「私はどうして私なのか」講談社 p223
- (23) S.J.ウォーリン・S.ウォーリン/奥野光・小森康永訳 1993 (2002)「サバイバーと心の回復力」金剛出版 p13
- (24) アンソニー・ギデنز/秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳 1991 (2005)「モダニティと自己アイデンティティ」ハーベスト社 p57
- (25) 高松里 2009p70
- (26) (27) 石原孝二編 2013p173
- (28) 今年の6月、オランダで開かれた「第10回世界吃音者大会」で世界的な作家であるデイヴィッド・ミッチェルが NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトのメンバーに語った言葉。帰国後の川崎益彦さんの口頭報告と「オランダ旅行記」による。
- (29) 中西正司・上野千鶴子 2003「当事者主権」岩波書店 p196
- (30) W.ジョンソン・D.メラー編 1967 (1974) p6
- (31) 貴戸理恵 2004「不登校は終わらない」新曜社
- (32) 児童心理 4月号臨時増刊 2013「子どもと向き合う先生」金子書房 p68 (33) 同書 p69
- (34) 伊藤伸二・吃音を生きる子どもに同行する教師の会編著 2010「親、教師、言語聴覚士が使える吃音ワークブック」解放出版社
- (35) 渡邊美穂 2013「自分らしく生きる子どもを育てるための吃音指導の在り方」平成24年度千葉市長期研修生研究報告 p28
- (36) 佐藤学 1997「教師というアボリア」世織書房 p304
- (37) 高松真里『精神科デイケアとサポート・グループ』高松里編 2009「サポート・グループの実践と展開」金剛出版所収 p234